

## 上顎左右埋伏犬歯に含歯性嚢胞を認め萌出誘導した1例

○中野 志保<sup>1)</sup>、谷口 芳子<sup>2)</sup>、松田 容士子<sup>3)</sup>、橋本 敏昭<sup>1)</sup>

1) はしもと小児歯科医院、2) 谷口歯科医院、3) 村岡歯科医院

**【緒言】**含歯性嚢胞は小児における歯原性嚢胞の中では比較的発生頻度が高いが、その多くは片側性であり両側性に生じるのは極めて稀である。今回パノラマX線写真で左右上顎犬歯の埋伏と転移及び含歯性嚢胞を偶然発見し、開窓後、牽引誘導した症例について報告する。

**【症例】**初診時10歳2か月の男児。上あごがずれている、前歯がすいているを主訴に来院した。口腔内所見では右側第2乳臼歯、第1大臼歯の交叉咬合を認め、上顎は正中離開していた。犬歯の萌出スペースは少なくALDは-9mmであった。デンタルX線写真により両側上顎犬歯は近心に傾斜した形で埋伏し、中切歯と側切歯の間に位置しており、歯冠部を内部に含む単房性の透過像を認めたが臨床症状は認めなかった。

まず萌出空隙確保と交叉咬合の改善のため、上顎に弾線付き拡大装置を装着し、歯列の拡大を行った。正中離開は2×4により整列を行い閉鎖した。結果右側臼歯部の交叉咬合は改善され、両側上顎犬歯の萌出スペースは得られたが犬歯の自然萌出の兆候は見られなかった。デンタルX線写真より側切歯根尖の吸収の可能性もあり、開窓したところ嚢胞は消失した。またエラスティックによる牽引で両側犬歯は正常に歯列内に誘導された。結果、永久歯を1本も失うことなく保定に移行し、経過観察となった。

**【考察】**含歯性嚢胞に対する処置としては、開窓法と埋伏歯を含めた摘出法とがあるが、学童期には開窓法をできるだけ選択し原因歯は摘出せずにその動態を定期的に観察し萌出誘導するのが望ましい。今回の症例においては、まず拡大により萌出スペースを確保して自然萌出を期待したが困難と判断し、隣在歯の歯根吸収等他に障害を起こす可能性も高いため開窓牽引により萌出誘導を行った。小児では、顎の発育等も考慮すれば外科的侵襲は最小限に行う事が望ましいが、嚢胞により発現するであろう障害を把握し、その侵襲が最小限になるように治療法を選択して、健全な永久歯列を誘導することが重要であると思われた。

## 上顎大臼歯部に出現した過剰歯の1例

○寶田 貫

九州大学病院 口腔総合診療科

**【目的】**過剰歯は永久歯列に多く認められ、発現頻度としては上顎前歯部に最も多く、ついで上顎大臼歯部に多いとされている。今回、上顎左側第二大臼歯の遠心部に矮小な臼歯が萌出し、その後、第三大臼歯が萌出した症例に遭遇したので報告する。

**【症例】患者**：30歳、男性 **主訴**：第三大臼歯4本と上顎左側大臼歯部過剰歯の抜歯を希望。

**既往歴**：特記事項なし **現病歴**：第三大臼歯の萌出開始は、上下顎右が10年程前、下顎左が2年程前であった。上顎左は8年程前に第二大臼歯の遠心に矮小な臼歯が萌出、ついで2年程前より矮小な臼歯を頬側へ押し出すように第三大臼歯が萌出してきた。

**現症**：上顎左側第三大臼歯はほぼ萌出し、矮小白歯（過剰歯）は第三大臼歯の近心頬側部に位置していた。X線検査で他の過剰歯は認めなかった。

**処置および経過**：第三大臼歯4本と過剰歯を抜去することとした。本年6月に左側上下第三大臼歯および過剰歯を抜去した。引き続き右側の上下第三大臼歯を抜去する予定である。 **抜去歯の観察**：上顎左側第三大臼歯の計測値は、冠長5.7mm、冠幅8.1mm、冠厚10.6mm、根長9.3mmで、咬頭は退化型、単根で根尖は完成していた。過剰歯の計測値は、冠長5.6mm、冠幅5.3mm、冠厚6.2mm、根長6.8mmで、咬頭は退化型、単根で根尖部の一部吸収を認めた。

**【考察】**過剰歯の発生原因については、未だ定説はないが、歯胚が何らかの原因で分割されるか、あるいは、第三大臼歯の副歯堤からの歯胚の形成、さらには、これらとは関係なく、余剰の歯胚が形成されることによる、との考え方が支持されている。本症例の過剰歯は、萌出順序ならびに大きさから考察すると、第三大臼歯の歯胚が歯の形成過程の早期に分割されたために生じたと推定される。

本症例は過剰歯の萌出過程が確認できた興味ある症例であった。